自閉スペクトラム症

「自閉症」と聞くと、「レインマン」という映画を思い出される年配の方もおいででしょう。この映画で描かれていた、強いこだわりと人とのかかわりの難しさを持つ人物は現在では古典的な自閉症とされます。一方、人口の約一割の人は、程度は様々ですが人付き合いやコミュニケーションの苦手さ、臨機応変な対応の難しさ、こだわり、感覚の敏感さなどを持つことが分かってきて、これを自閉症スペクトラム（AS）と呼ぶようになりました。AS の特性は軽いものから重いものまで様々で、実際に生活上の困りごとを持つ人は人口の 2～3%とされ、この場合を自閉スペクトラム症（ASD）と呼んでいます。特性を持たない方と AS、ASD の間に決まった境目はなく、置かれた状況とのバランスで困難が生じるか変わるので、「スペクトラム（連続体)」と呼ぶようになりました。

AS の特性は保護者の育て方やしつけが原因ではなく、生まれつきの脳のタイプで、「10 人に一人が抱える生きづらさ」とも言われます。上手な人付き合いやコミュニケーション、状況に応じて柔軟に対応することが苦手で、とてもマニアックなことに興味を持ちやすく、こだわりが強く頑固に見られることがあります。一方で、裏表のない誠実さや、ルールを大切にする姿勢、興味のある分野を深く追及する職人肌的な力などで専門職や技術職で活躍されている方もたくさんおいでです。つまり、AS は短所だけでなく長所でもあるわけです。

AS の方が ASD、つまり特性に伴う困りごとを持つのは、就園、就学、進学、就職、子育てなど環境が大きく変わったときが多いとされます。受診のきっかけは心や体の不調、不安や気持ちの落ち込み、周囲の方とのトラブルなどがあります。幼児期に気づかれるお子さんが多いですが、中・高・大学生や社会人になってから診断を受ける方も少なくありません。病院では心身の改善を図るため、ご本人にストレスの少ない環境になるよう様々な支援を行うとともに、薬での改善を図ることもあります。

当院では、公認心理士と協力して、診断のための検査を行い、結果を保護者や

ご本人にお話し、理解を得ながら適切な支援を考えています。お子さんの発達面のことで気になることがありましたら、かかりつけ医さんから当院にご紹介くださるようお伝えください。

【副院長兼小児科診療部長　大木　康史】

